

当報告の内容は著者の著作物です。

Copyrighted materials of the author

第2回（通算第15回）基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

平成24年7月4日（水）14:00-18:00 AA研301号室

（要旨）シンガポールにおける人々の移動と記憶の再構成--音と芸能をめぐる人々と海外ネットワークの関係性

伏木香織（AA研ジュニアフェロー）

本発表は、シンガポールという都市を舞台に、移動と移動する人々をどのように語ることが可能なのかという問題について、音世界（音風景、**soundscape**）という切り口から、語り口そのものの抱える問題点を明らかにするとともに、どのように語ることができるのかを探る試みである。東南アジア諸地域、特にマレー半島やインドネシアなどの社会や芸能を論じ、語る際に、各「民族」、「華人」などの括りや、それに基づく文化活動を行う人々の「まとまり」を基本概念とすることは、常套手段である。シンガポールの社会や文化を論じる場合、先行研究の多くは、そのまとまりをエスニシティや華人方言グループ、寺廟団体などとしてとらえてきた。それぞれ他称であろうが自称であろうが、まとまりを形成する人々もまた、自らのアイデンティティをそのまとまりに求め、表現することも多い。しかしながら、その実態はゆるやかなまとまりと移動の連鎖なのであり、そのネットワークなのである。本質主義的にまとまりを「コミュニティ」として語ることはできないが、現に「そこにある」人々の暮らしとまとまり、それを本質主義に陥らず、エスニシティやナショナル・アイデンティティの問題に還元せず、いかに語ることが可能なのか。

本発表では、具体的事例として、シンガポールという都市空間に、しばしば社会問題化し、宗教、文化、教育政策ともリンクする形で現前化する音世界が生じる場とそれを作るまとまりをとりあげた。とりあげたのは、喧噪の音のスペクタクルとなる遶境、さまざまな場面に使われる潮州由来の音楽である潮州鑼鼓、各寺廟の祭礼や旧暦7月には路上に野外劇として出現することもある各種戯劇、シンガポールでは通年で行われる路上歌謡ショーの歌台、主としてアマチュアを中心として活躍し寺廟の祭礼や葬礼などの際にも使われることがあった音楽の各種団体である。HDBフラットの立ち並ぶ、人々の生活空間に突然、仮設テントの形で出現する宗教団体とともに、各種の音楽の爆音と人々の叫びが通い合う遶境は、さまざまな由来をもつ人々、神明、音楽が交錯する場であり、主催者がある特定の寺廟であったとしても、それに関連する他の寺廟やその音楽隊、童乩とそれらに降臨する神明たちは、ひとつの集団に帰することができない。潮州鑼鼓は「潮州の」芸能とされながらも、シンガポールでは福建系の寺廟や遶境などにおいて、福建語で「公館」と呼ば

れる廟堂音楽として使用されるほか、「潮州系の」葬送儀礼にあつては、花燈隊のなり手（女性）を国内では失い、エージェントを通して中国本土からの留学生を日雇いのアルバイトで雇い、彼女たちへの指示や彼女たちとのやりとりは普通語で行われる。また音楽団体内部での音楽的レパートリー、演奏技術の習得に関しては、国内だけではなく、「文革後の中国」の状況をかんがみて、シドニーやサンフランシスコ、パリなどの鑼鼓団体と情報やレパートリーの交換が行われる状況にある。各種戯劇は 1990 年代後半を境に、国内のプロフェッショナルな団体は急速に衰退し、種類によっては、香港や中国、インドネシアやマレーシアといった海外とのつながりがなくては上演もできない状況にある。またマレー半島で旧暦 7 月の「マンダリン」の野外歌謡ショーとしてしられる歌台は、映画の影響からシンガポール政府にも認められるようになり、「旧暦 7 月の「福建語」歌謡を含むシンガポール固有の歌謡ショー」という演出でもって、「シンガポールの文化」化が進められている。しかし実際の舞台には、シンガポール人の歌手以外に、中国や台湾、マレーシアなどからの様々な出自の歌手たちが多くいて、旧暦の 7 月の出稼ぎの場になっているし、福建語が得意でない歌手ですら、メモを片手に歌う福建語のレパートリーの多くは 1930 年代の台湾に生まれた「台語歌謡」なのである。アマチュア団体が室内楽として伝えてきた音楽の一例としてとりあげる南音は、2009 年に中国泉州の芸能としてユネスコの無形文化遺産として登録された芸能だが、シンガポールの音楽社は、「東南アジアの南音」を追求し、「国際南音大会」などを積極的に行ってきたほか、無形文化遺産の選定登録にも大きな影響を及ぼしてきた。

このような事例を通して確認できるのは、リアルに「そこにあるもの」ものとは、浮動する人とももの、そのまとまりである、ということである。しかも空間と時間概念を含むものとしての音世界（soundscape）を形成する音を使ったさまざまな表現は、その上演、実現に際し、記憶（公、個とも）を集合し、確認し、意識的にもの化したうえで資源化した Heritage として、人々の前に現象する。つまり、音世界が示すものとは、個と公が交錯したものとして脈略に応じて形成される集合的記憶と、時空間において浮動の、脈略依存のゆるやかな連携なのである。このように現実の「そこにあるもの」を認識したとき、書き手としてのわれわれは、浮動する人ともものをどのように描くことが可能なのだろうか。もはや、Halbwachs の古典的な集合的記憶に関する記述には、現実を描き出す可能性を見出すことはできないのである。

*本発表では「書く」という行為そのものに対し、「書く」必要があるのかというメタ化した問題は棚上げし、「書く」こと、認識することを前提に問題を想起したことをお断りしておきたい。